

参加者 :S・Yさん

は	と	本	ん	恐	五	す	こ	を		投	都		の	で	の	て				
ア	教	だ	は	ろ	キ	。	れ	憎	私	下	会		は	き	授	初				
メ	え	っ	ー	し	ロ	河	は	む	が	さ	で		初	ま	業	め				
リ	て	て	日	い	離	野	は	よ	こ	れ	、		め	し	や	て				広
カ	く	相	本	経	れ	さ	被	り	の	た	本		て	た	映	広				島
を	だ	手	も	験	た	ん	爆	戦	旅	の	当		で	が	画	島				で
憎	さ	の	加	を	郊	は	の	争	で	か	に		し	実	、	を				学
ん	い	関	害	さ	外	十	証	を	一	と	七		た	際	小	訪				ん
で	ま	係	者	れ	の	四	言	憎	番	疑	十		。	に	説	れ				だ
い	し	ない	ー	た	自	歳	者	め	印	つ	九			広	な	ま				こ
る	た	人	と	に	宅	の	河	ー	象	て	年			島	ど	し				と
も	。	を	仰	も	で	時	野		に	し	前			に	で	た				
の	私	殺	っ	か	経	に	キ	と	残	ま	こ			行	様	。				
だ	は	し	て	わ	験	爆	ヨ	い	っ	う	の			く	々	こ				
ろ	今	て	い	ら	さ	心	美	う	た	ほ	場			こ	な	と				
う	ま	い	まし	ず	れ	地	さん	言	言	ど	所			が	戦	で				
と	で	る	した	河	ま	か	の	葉	葉	で	に			で	争	、				
思	被	か	。	野	した	ら	言	で	は	し	原			き	を	学				
い	爆	ら	日	さ	た	三	葉	す	ー	た	爆			た	学	校				
込	者	ら			。	十	で	。	人	。	が				ん	し				

と	折	内	し	平	い	ら	同	ま	奪	な	が	れ	料		と	は	証	そ	ん
い	り	外	た	和	た	四	じ	し	わ	か	原	て	館	二	思	こ	言	し	で
う	鶴	か	。	公	と	千	よ	た	れ	っ	爆	い	で	日	い	う	者	て	いた
方	は	ら	そ	園	い	度	う	。	る	た	の	ま	は	目	ま	方	の	確	の
が	十	送	れ	に	う	の	な	今	事	と	被	し	被	は	し	の	話	か	で
モ	二	ら	は	は	こ	光	日	私	が	思	害	た	爆	平	た	の	を	に	こ
デル	歳	れ	被	折	と	に	に	が	実	い	に	。	さ	和	。	話	実	そ	の
と	で	て	爆	り	を	焼	、	い	際	ま	あ	展	れ	資		を	際	う	証
な	亡	く	し	鶴	私	か	突	る	に	す	っ	示	た	料	が	実	だ	言	
っ	く	る	た	が	は	れ	然	天	起	。	て	さ	方	館	い	際	と	言	
た	な	も	子	た	絶	骨	原	気	き	そ	死	の	へ	行	に	に	思	は	
銅	っ	の	ど	く	対	も	爆	の	た	こ	ぬ	遺	き	ま	聞	く	知	大	
像	た	だ	も	さ	に	残	が	い	と	に	な	品	ま	し	こ	こ	ら	変	
の	佐	そ	た	ん	忘	ら	落	晴	い	あ	ん	や	し	た	と	と	さ	驚	
周	々	う	ち	飾	れ	な	ち	れ	う	る	て	説	ま	。	が	が	れ	き	
り	木	で	を	っ	ま	か	、	た	こ	命	考	明	。	平	で	で	ま	ま	
に	禎	す	思	て	せ	っ	三	今	と	が	え	が	展	和	き	る	し	し	
か	子	。	っ	あ	ん	た	千	日	を	簡	て	展	示	資	こ	る	た	た	
ざ	さん	の	国	ま	。	人	度	と	知	単	も	示	さ		と	の	。	。	

				あ	テ		り	て	し	族		な	し	を	念		し	偵	こ	っ
				り	ム	今	継	は	て	や	私	い	た	毅	式		た	子	の	っ
				が	の	回	い	い	広	友	は	と	態	然	典	三	°	さ	日	て
				と	皆	こ	で	け	島	人	こ	誓	度	と	で	日	す	ん	の	あ
				う	様	の	い	な	で	な	の	っ	が	し	は	目	の	の	虹	り
				ご	、	よ	き	い	起	ど	三	て	二	た	子	は	生	の	ま	
				ざ	寄	う	た	戦	き	の	日	い	度	態	ど	平	涯	ひ	し	
				い	付	な	い	争	た	身	間	る	と	度	も	和	を	ろ	た	
				ま	を	機	で	と	こ	近	で	よ	戦	で	代	紙	ば	°		
				し	く	会	す	い	の	な	学	う	争	述	表	芝	で			
				た	だ	を	°	う	悲	人	ん	で	と	べ	の	居	広			
				°	さ	く		過	惨	に	だ	し	い	て	小	に	島			
					っ	だ		ち	で	伝	こ	°	う	い	学	参	の			
					た	さ		に	二	え	と		過	、	生	列	高			
					皆	っ		つ	度	た	を		ち	そ	が	し	校			
					様	た		い	と	い	、		を	の	平	ま	生			
					、	パ		て	繰	で	ま		繰	毅	和	し	が			
					本	ル		広	り	°	ず		返	然	の	た	佐			
					当	シ		め	返	そ	は		さ	と	誓	°	々			
					に	ス		語	し	そ	家		さ		い	記	木			

参加者 :T Hさん

風	際	う	っ	実	つ	方		の	島	『		争	の		し	ら							
で	の	な	て	的	い	の	広	原	は	ピ		』	世		て	ゆ							
は	記	声	い	な	た	話	島	子	、	ー		だ	で		、	る							
あ	憶	は	た	、	。だ	だ	に	爆	第	ス		。	あ		決	人							
っ	を	、	。	起	が	私	着	弾	二	ア					し	が							
た	も	思	だ	こ	、	自	き	が	次	ク					、	持							
の	の	い	が	る	話	身	、	落	世	シ					つ	つ							
、	描	す	、	わ	し	、	は	と	界	ヨ					べ	き							
原	か	の	話	け	て	学	じ	さ	大	ン					き	基							
爆	れ	も	し	が	い	校	め	れ	戦	日					本	的							
投	た	辛	い	な	よ	の	に	た	の	広					な	権							
下	絵	い	る	う	う	授	聞	地	際	島					利	と							
直	は	よ	方	な	ど	業	いた	で	、	『					自	由							
後	子	う	の	こ	か	や	の	あ	人	』					由	。							
の	供	で	絞	と	非	本	は	っ	類	に					。								
悲	向	被	り	だ	現	で	被	た	史	参					の								
慘	け	爆	出	と		原	爆	あ	上	加					も								
さ	の	し	す	思		爆	者	っ	初	し					の								
	画	た	よ	思		に	の	た	め	た					。								
									て	。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													
										。													

ま	原	ず	た	建	奨	た	の	は	ビ	た	し	な	想	原	を	た		て	を
ま	爆	、	た	物	励	。原	中	、	ル	。あ	て	い	像	爆	知	。そ	次	い	物
だ	ド	鉄	た	の	館	爆	で	似	が	と。は	み	し	投	投	る	の	日	語	
っ	ー	骨	め	屋	は	ド	も	て	立	は	ると	下	後	下	こ	、	。こ	る	
た	ム	と	、	根	、	ー	一	も	ち	全	、	後	の	後	と	私	れ	に	
。	の	レ	真	や	爆	ム	つ	似	並	部	歩	の	写	の	は	は	は	は	
	周	ン	上	ド	心	だ	っ	つ	び	瓦	い	真	真	。特	私	本	十	十	
	り	ガ	か	ー	地	。	だ	か	、	礫	て	だ	だ	に	た	当	分	分	
	に	の	ら	ム	の	原	形	な	路	だ	い	。	。	起	。	の	だ	だ	だ
	は	壁	の	部	ほ	爆	を	い	面	っ	る	。	。	き	。	私	っ	っ	。
	、	だけ	爆	分	ぼ	ド	保	光	電	た	人	。	。	た	。	の	た	た	。
	当	が残	風	は	真	ー	つ	景	車	。	が	。	。	。	。	考	。	。	。
	時	った	に	木	下	ム	て	だ	が	今	ち	。	。	。	え	。	。	。	。
	の	た	耐	材	に	こ	い	っ	行	の	ら	。	。	。	は	。	。	。	。
	瓦	そ	え	で	位	と	た	。	き	デ	ほ	。	。	。	間	。	。	。	。
	礫	う	る	作	置	広	建	。	交	パ	ら	。	。	。	違	。	。	。	。
	が	だ	こ	ら	し	島	物	。	う	ー	と	。	。	。	っ	。	。	。	。
	残	。	と	れ	て	産	が	。	広	ト	見	。	。	。	た	。	。	。	。
	っ		が	て	い	業	あ	。	島	や	え	。	。	。	の	。	。	。	。
	た		で	い	た		っ	。	と			。	。	。	が	。	。	。	。
			き	い			っ	。				。	。	。		。	。	。	。

最終日、八月六日は広島に原爆が落とされ	ても興味深いと思っただ。	にっついて理解を深められることを知って、と	た。こうした親しみやすいところからも平和	を通して、平和への願いを強めることができ	講演会後には、書道パフォーマンスや合唱	今、私たちができることだと思っただ。	爆について学んだことを伝えていくことが、	を経験したことがない私たちでも、戦争や原	け取られていたかはわからない。しかし、原爆	の方が伝えたい恐怖や体験を私が等身大で受	は原爆や戦争を経験したことはない。被爆者	うな声で私たちに語りかけていたと思う。私	たが、どちらの方も感情がこもった、苦しそ	広島で被爆者の方の話を聞く機会は二回あっ	を深めるための体験型イベントに参加した。	し、被爆者の方の話や、原爆についての知識	私たちはその後、グリーンアリーナに移動	やいたのを、とてもよく覚えてる。	そこだけ時が止まったみたい、と友達がつぶ
---------------------	--------------	-----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	------------------	----------------------

な	じ	だ	っ	分	世	原	じ	も	声	一		し	平	祈	外	多	見	念	た
っ	場	ろ	と	間	界	爆	よ	暑	し	分	原	う	和	っ	の	く	学	式	日
た	所	う	み	だ	中	が	う	か	か	間	爆	れ	を	っ	人	、	し	典	だ
。	で	か	ん	け	が	使	に	聞	聞	の	が	し	願	い	も	一	た	が	。
爆	、	。	な	だ	平	用	と	こ	こ	黙	落	く	っ	。	、	般	行	行	こ
弾	一	七	同	が	和	さ	て	え	え	と	と	思	て	。	席	わ	わ	の	
が	瞬	十	じ	、	に	れ	も	ず	、	う	さ	え	い	。	ま	れ	れ	日	
爆	の	九	こ	年	な	る	暑	、	日	を	れ	た	る	。	は	て	は	は	
発	う	年	と	齡	り	こ	い	光	光	行	た	八	人	。	、	び	い	平	
す	ち	前	を	、	ま	と	日	が	照	っ	時	十	が	。	広	っ	た	和	
る	に	の	考	性	す	が	だ	照	り	た	五	い	。	。	島	し	た	記	
の	た	今	え	別	よ	あ	っ	付	付	分	分	。	。	。	に	り	た	念	
は	く	と	て	、	う	り	た	け	け	に	五	。	。	。	集	ま	た	公	
一	さ	同	いた	国	に	ま	と	て	て	合	分	。	。	。	まり	っ	園		
瞬	ん	じ	の	籍	。	せ	聞	き	き	わ	に	。	。	。	平	っ	に		
で	の	時	で	関	た	ん	く	と	と	せ	。	。	。	。	和	。	て		
も	人	刻	は	係	っ	よ	。	と	と	て	。	。	。	。	。	。	、		
、	が	に	な	な	た	う	二	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。		
今	亡	、	い	く	の	に	度	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。		
も	く	同	い	き	一	。	と	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。		

な	で	あ	こ			も	け	私	「	げ	っ	心		い		こ	っ	っ	原	
い	奪	っ	れ	平	発	の	で	た	平	る	て	は	私	て	の	世	た	た	爆	
の	わ	つ	は	和	信	に	は	ち	和	と	い	低	自	の	に	に	人	人	症	
だ	れ	て	大	へ	し	せ	、	が	」	、	た	か	身	知	存	に	は	は	に	
。	て	は	前	の	て	ず	平	が	が	ウ	か	っ	、	識	在	た	た	苦	に	
	し	な	提	道	い	、	和	脅	脅	ク	た	た	こ	を	し	く	く	し	に	
	ま	ら	と	は	き	私	は	か	か	ラ	と	思	の	た	て	さ	さ	ん	ん	
	う	い	し	長	たい	は	、	さ	れ	イ	う	。	持	く	は	ん	ん	い	で	
	こ	。	て	い	。	友	訪	れ	て	ナ	。	。	つ	さ	、	い	。	。	い	
	と	人	、	か		達	れ	い	い	情	だ	。	て	戦	可	な	。	。	る	
	が	権	あ	も		な	い	。	る	勢	が	。	い	争	なる	ら	。	。	人	
	、	ど	っ	し		に	。	の	。	を	、	。	。	や	理	ない	。	。	や	
	あ	こ	て	れ		に	。	が	。	は	、	。	。	核	由	も	。	。	、	
	っ	ろ	い	な		戦	。	わ	。	じ	。	。	。	兵	が	の	。	。	心	
	て	か	い	い		争	。	か	。	め	。	。	。	器	あ	だ	。	。	に	
	い	、	は	は		や	。	か	。	、	。	。	。	に	っ	。	。	。	深	
	い	命	は	は		核	。	し	。	本	。	。	。	対	っ	。	。	。	い	
	は	が	は	は		兵	。	か	。	格	。	。	。	す	っ	。	。	。	傷	
	ず	一	は	は		器	。	し	。	的	。	。	。	る	っ	。	。	。	を	
	が	瞬	は	は		は	。	か	。	に	。	。	。	た	っ	。	。	。	負	

広島の悲劇

千九百四十五年、昭和二十年、八月六日の
その日、アメリカが広島に新型土爆弾を落とす
ました。その一つの爆弾で広島は、
平知な町から、地獄の町に変わってしまいました
した。

ぼくは実際に三泊四日で広島に行きました。
ぼくが見たのは世界遺産の「原爆ドーム」
を見て、広島にいた人達は苦しかったんだ
と感じました。

ぼくは広島にまだいた時に、ある人の証言
を聞きました。その名前は河野キヨ美さん。
実際に原爆のことを知っており、「悪夢のよ
うだった」と言っていました。キヨ美さんが
言っていたことを言います。

「私は一つの爆弾で景色が変わって見えま
した。一瞬で人が死にました。およそ十四万
という多い人数が死にました。ひがいがおき
てやけどを負った人はこう言っていました。

水がほしいです。のみたいです。おねがい
しますと何度も何度も言い続けました。死
んだ人もいました。飲めたらもうどうでもい
いと言う人もいました。全身はやけどを負っ
てひひびと服がくっついていました。

原爆の高さは釜長およそ三メートル、直径
七十一cm、重さは約四七。メスのぞうと同じ
重さです。

学校生活ではとても鬼畜でした。当時キヨ
美さんは女学生であり本土決戦に備えて、
竹槍の訓練していました。当時その時の先生
はこう言っていました。「その竹槍で相手の
のどをかききれ」といいました。竹の槍でや
つてもすぐにこわれるにきま、こいるのに。
ですが私は上からの命令には逆らえなかつ
た。そうしないと殺されてしまふとおっしゃ
いました。

ある日、キヨ美さんがねている時間に夢の
中に男子の中学生が出てきました。その中学
生は「こっちに来い・こっちに来い・こっ

と死の世界へ連れさられそうに怖かったと、
あ、し、か、い、ま、し、た。

その日から毎晩毎晩同じ夢を見ていました
その中学生はキヨ美さんが逃げていた途中
の志だんにうめらたていた子供達がいました
。その正体は夢に出てきた中学生でした。そ
の中学生は放射線物質をあび、無傷のままに
死んでいった人達でした。

キヨ美さんは現在、あの日を私は忘れな
いことを出版しました。二度とくり返してはい
けないことを本に表わしています。ぜひ、大
人で見てください。

ベースアクション

in ヒロシマに行つて

2024年 8月4日(日)～8月6日(火)の3日間、
ピースアクション in ヒロシマに参加しました。

ぼくは、原爆のことをあまり知らなかったので、
平和について学びたいと思い、参加を決めました。

1日目 (8月4日(日))	①室内石碑めぐりガイド ②被ばくの証言
2日目 (8月5日(月))	③平和記念資料館 ④石碑めぐり平和記念公園コース ⑤虫エのひろば
3日目 (8月6日(火))	⑥平和記念式典

① 室内石碑めぐりガイド

室内で、平和記念公園内にある慰霊碑について、ガイドの方から話を聞きました。それぞれの慰霊碑にどういう願いがこめられているのか、聞きました。

ぼくが特に印象に残った物が原爆供養塔です。広島に原爆が落とされて79年たった今でも、引き取り手のない骨や、だれが分からない骨がまだ約7万柱あると聞き、改めて原爆のおそろしさを実感しました。

② 被ばくの証言

原爆が落とされた次の日、広島市にいるお母市さんを探しに行ったそうです。町全体が焼けていて、足場がないほど土が倒れていたそうです。変な臭いがするとも言っていました。

当時、もし爆弾が落とされた時に災が、お母市さんがおられたように建て物を小ち～中ぐらいの年の子がこおしていました。

約8200人働かっていたそうで、そのうち約6200人が亡くなってしまったと聞きました。

ぼくには想像もできないようなことが実際にあったと知りました。

③ 平和記念資料館

原爆が落とされた時の写真や当時の被ばくした物などたくさん見てきました。熱で曲がったガラスびん、曲がったり折れたりした鉄骨かけが残っているかばやクロイドになった皮ふなど、ぼくには信じられないようなものがたくさんありました。戦争かとても恐ろしいことをさらに感じました。

④ 碑めぐり平和記念公園コース

ガイドの方といっしょに平和記念公園を歩き、碑を見ました。原爆の子の像は写真では見たことはあったけどモデルがいるとは知りませんでした。韓国人原爆犠牲者慰霊碑にたくさん人がきて、供養をしていました。原爆のせい、他の国の人も被害を受けたことを知りました。

⑤ 虫エのひろば

広島県立総合体育館でヒロシマ虫エのひろばに参加しました。そこでも被ばく者の話を聞きました。庭に出ている時爆風で何メートルもとばされらしく、体中にガラスがささっていたそうです。とても明るい光が差し込んだということを書いて伝えてくれました。ふとんにかくれて死をかくごしたそうで、その時の家族の思いはぼくには想像もできません。また、高校生の取り組みを教えてもらいました。被ばく者から話を聞き、その場面を絵で伝えているそうです。またもう一つの方の高校では英語を学び、被ばく者の話を外国の人に伝えているそうです。

⑥ 平和記念式典

人がとても多かったので、モニターで見ました。
様々な国の人に来ておどろきました。
今まで平和記念式典を知りませんでした。
たくさんの人に来ていました。
原爆のことを他の国の人も考えているかもしれないと
思いました。

まとめ

ぼくはこの学習を通して戦争で原爆がたった一つ落とされただけで、あんなにおそろしいことになると知りました。また、被ばく者の話はとてもきょうな経験になりました。ぼくは絶対に戦争をしないでほしいと思います。
ロシアとウクライナの戦争や、イスラエルとハマスという組の戦争をしているニュースを見るととても悲しくなります。それにロシアは核を使おうとしていると聞いたことがあります。また他の人が恐ろしい思いをしておぼくは、早く戦争が終わり、平和な社会になるといいなと思います。

『ピースアクションinヒロシマに参加して』

参加者 :H・Mさん

広島市で学んだこと

～被爆者の話を聞いて～

被爆者の話は原爆の恐ろしさや、当時の悲惨な様子がよく伝わり、胸が張り裂けそうな気持ちになるものでした。とても良い経験をしたと思います。

広島被害を知るまでは「勉強すること」「友達と話すこと」「好きなことをすること」などは、すべて当たり前なことだと思っていました。ですが、被爆者の「生きたい」という言葉を耳にして気づきました。「生きる」ことは「当たり前ではない」ということです。

勉強することは「勉強ができる」ということ。

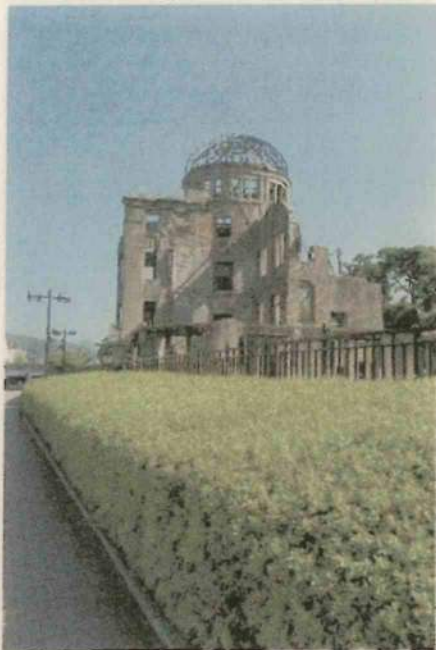
友達と話すことは「友達と話せる」ということ。

好きなことをするのは「好きなことができる」ということ。

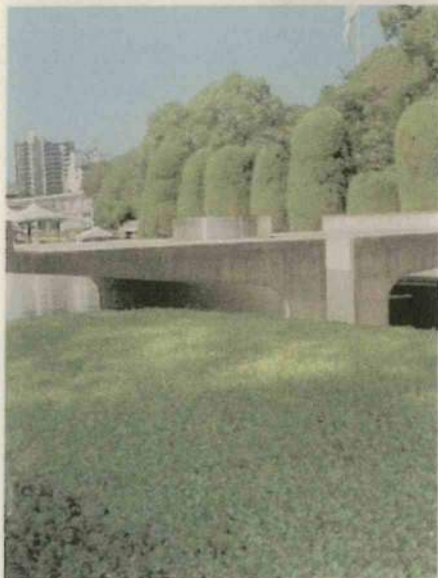
戦争という悲惨な経験を経て、日本が平和な世へ立ち直ったからこそ、これらを当たり前だと感じられるのだと気づきました。

今回の広島旅行で、原爆についても被爆者についてもこれまで以上によく知ることができました。また、原爆のことを学校の自由研究としても活用することができてよかったと思います。

～広島市で撮影した写真～



①原爆ドーム。かろうじて骨組みと外壁の一部が残った。



②平和の灯。「核兵器が地球上から姿を消すまで燃やし続けよう」

という反核悲願の象徴である。



③広島平和記念資料館。被爆当時の資料が数多く展示されている。

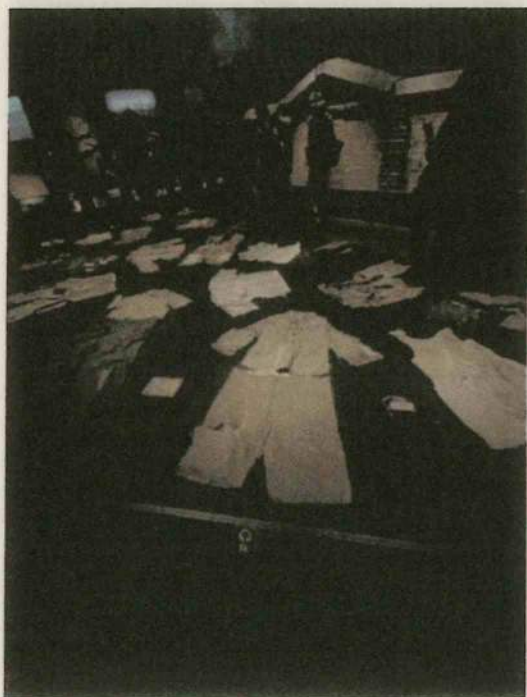


④広島型原子爆弾「リトル・ボーイ」の模型。

B-29「エノラ・ゲイ」から投下された。



⑤原爆による「黒い雨」の斑点が残るリュックサック。



⑥被爆者の方々が当時身に付けていた衣服。

原子爆弾の仕組み

当たり前の日常を一瞬で壊滅させた兵器

広島市に落とされた原子爆弾「リトル・ボーイ」は長さ 3m、重さ 4 トンという形で作られ、これにより約 14 万人が命を落とした。

ここでは、原子爆弾の製法について調べる。

広島型原子爆弾は、ウラン※1 という元素がもとになって、作られた。この元素に中性子※2 を衝突させると、原子核※3 が二つに割れる。これを“核分裂”といい、このときに膨大なエネルギーを放出する。ひとつの核分裂では少しのエネルギーしか出ない。

だが、核分裂と同時に中性子が飛び出し、一気に連続して核分裂が起こることにより、膨大なエネルギーとなる。

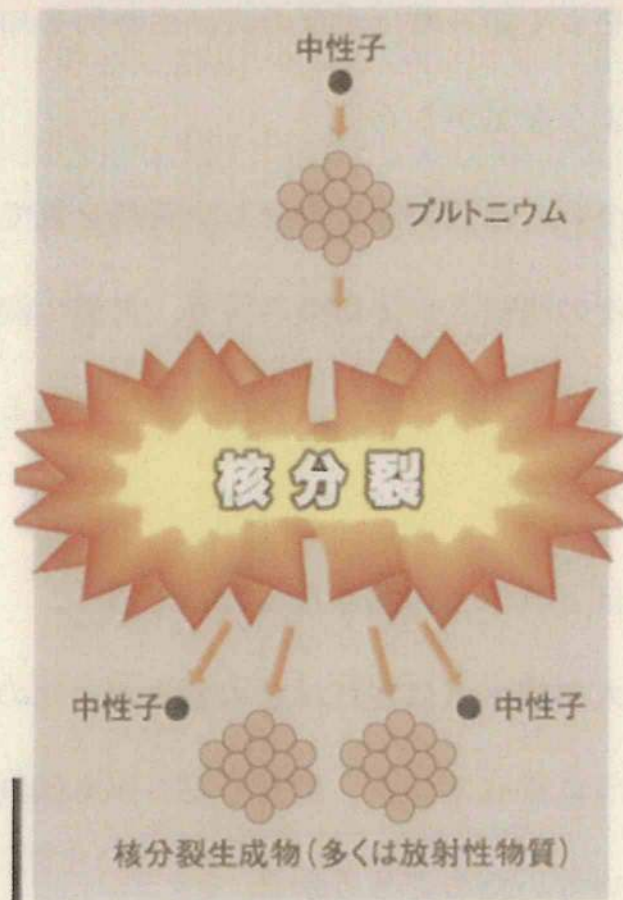
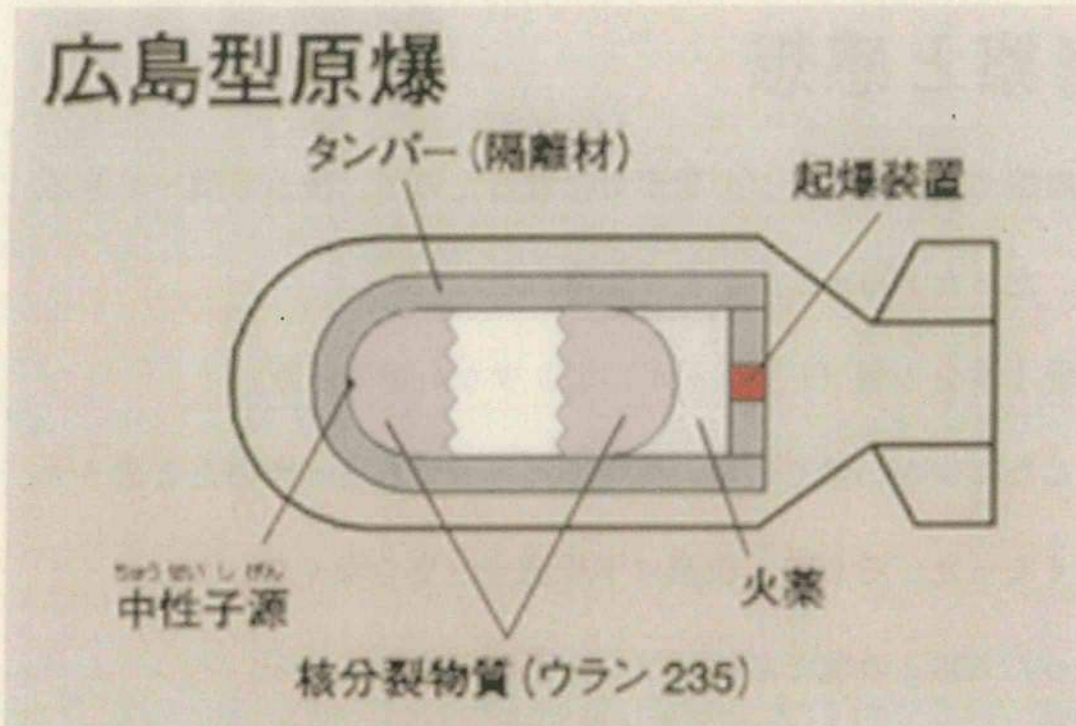
このとき「熱線」「爆風」「放射線」が出る。

この仕組みを兵器に利用したのが原爆である。

※1 原子番号 92 番。核分裂反応を起こす物質。現在は、原子力発電の燃料として使われている。

※2 原子核を構成している電氣的に中性な粒子。

※3 原子の中心部分。



出典：長崎市 被爆継承課「長崎の平和」ホームページより引用

考察と感想

原爆で燃えたウランの量が気になったので、後から調べてみると、たった 800 g しかなく大変驚いた。

牛乳 1 本分の量 (1 リットル) より少ない量だった。

こんなに少ない量で広島を全滅させてしまったのだと思うと、怖くなった。そして、次第に不思議でたまらなくなった。

たった 800 g の塊であれだけの被害が出るなんて…。

ウランの恐ろしさをよく知ったはずなのに、また何も知らない「ふりだし」に戻ったような気がした。

大規模な被害については資料館で生々しい資料を見て、被爆者の方の証言を聴き、その凄惨さが体に染み渡り、自然に涙が出た。

だが、被爆時の様子が「実際に起こった出来事」であるとは信じられない私もいた。

体中に浴びた熱線はどれほどの熱さだったのだろう。

体中に走る人類最大の痛みとはどれほどの痛みだったのだろう。

皮膚がぼろ布のように垂れ下がり、男女かどうかも区別がつかない人たちは本当に歩いていたのだろうか？

原爆が落とされたときの光はどのくらいまぶしいものだったのか。

被爆地の広島の様子はどうなっていたのか。

原爆で家族を亡くした人たちはどんな気持ちだったのだろうか。

そんな、考えても考えても本当の意味で一生分かることのないことが頭の中をぐるぐるさまよった。正直、皮膚が垂れ下がって歩く人々がいたという話はまだ半信半疑で、信じられないという気持ちが強い。だが、これは事実なのだ。絶対に忘れてはいけない、語り継がなければならないことなのだ。そう思うと、真っ先に、世界から核兵器を早くなくさなければ！と強く思えた。

核兵器を持つ国は今でも存在する。1945年に日本で起きたあの地獄をまた引き起こさぬように、核保有国に「残酷さ」を伝えなくてはならない。

世界唯一の被爆国、日本だからこそできる一番の使命は「原爆の悲惨さを語り伝え、世界から核兵器をなくすこと」なのだということを、あらためて胸に刻んだ。

参加者 :M Hさん

広島へ訪れて考えたこと

01

2024/8/4 ~ 2024/8/6 広島県広島市平和記念公園



2024年8月4日から6日、私は初めて広島を訪れました。

学校の社会の授業で戦争について学んだことと先生におすすめしていただいた本を読んだことから戦争について興味を持ったことがきっかけです。

このレポートはこの3日間で見たこと、感じたこと、学んだこと、考えたことをかきます。

1日目は室内で広島建物や慰霊碑についてのお話と、被爆者の河野キヨミさんのお話を聴きました。見たことのある、建物や慰霊碑が多かったですが、作られた理由、作られるまでの経緯、込められている思いまで詳しく知ることができました。朝鮮の方の慰霊碑もあり、ひとつの原子爆弾が本当に多くの人の命を奪ったということが広島を訪れる前より感じられました。

河野キヨミさんは当時、私と同じ14歳だったそうです。私はまだ大人じゃないので、どうだかわかりませんが中学生の時のことを鮮明に覚えているほど怖かったんだと実感しました。そして、被爆した方のお話を聞いているということは、原子爆弾はとても昔のように感じていましたが、まったく遠い過去ではないと言うことを強く感じました。また、このような中でも紛争がいくつも起こっている

参加者 :M Hさん

し世界では核を持っている国が多くあることがとても怖く感じました。

2日目は広島平和記念資料館の見学と実際に平和記念公園の中の建物と慰霊碑を見学しました。

平和記念資料館では多くの人がいるのにもかかわらず、入った瞬間からすごくシーンとしていました。写実的は絵や写真がたくさん展示されていました。全身が焼けて、顔も見えないような男子、血で茶色くなった幼稚園くらいの子のお洋服、山積みになった頭蓋骨などがありました。途中で、私はとても吐き気がしてしまって最後まで見るのが辛かったです。しかし、当時生きていた大人、子供達はみんな目の前で家族や友達が亡くなって行くのをみたり、熱くて死にそうだったりしていたのを考えると、本当に戦争は良くない そう思いました。

平和記念公園内の見学では、ピースボランティアという方達と見学しました。ピースボランティアの方は私たちの目を見てうったえるように色々なことをおしえてくれました。その中でもとくに印象に残ったのは、「平和の軸線」というものです。「平和の軸線」とは平和都市記念碑と原爆ドームを点としたときの直線上の部分の建物外壁を白いラインで強調していることです。平和記念資料

館の他、土谷総合病院や県立総合体育館などに白いラインが入っています。どの建物もデザイナーは違いますが、その平和の軸線は採用されているそうです。そのとき私は平和を守ろうというたくさんのひとのおもいがこめられていることに目頭が熱くなり、感動しました。



参加者 :M Hさん

最後の3日目は8月6日です。広島に原子爆弾が落とされた日です。私は3日目平和記念式典を見学しました。この式典では111カ国とEU代表国が出席し、詳しい人数は分かりませんがたくさんの方が来場していました。外国の方もいました。多分、アメリカの方もいたと思います。テレビを通して家族や知り合いも見ていたそうです。先程と被ってしまいますが、やっぱりみんな平和を願っているんだと思いました。

そして、戦争は人々に苦しみと悲しみを与え続けています。被爆した方や戦争の中を生きている人たちのことを体験することはできませんし、絶対に体験したいとはおもえません。今自分たちは学ぶことで、戦争というあやまちを二度と繰り返さないための知恵を得ることができ、またこれからそれらのことを伝えていくことの責任を感じることができると思います。

